

〈原著論文〉

## 中学生の英語語彙形成における メンタルレキシコン上の連想がもたらす効果 ～「言葉のネットワーク」の活用を通して～

A Study of Vocabulary Building for Junior High School Students  
with a Mental Connection between Ideas in Mental Lexicon

赤穂市立赤穂東中学校 小溝 健二\*<sup>1</sup>

**要約：**英語学習において、語彙習得に困難を抱える小中学生は多い。新学習指導要領においても、将来に向けた英語力の強化を大きな目標としており、数多くの先行研究等も示されているが、学習者の英語力向上には今後も長期的な取組が必要であると考えられる。

そこで、語彙習得の負担を軽減した上で、語彙の定着をより進めるために、母語である日本語での連想を利用した学習方法について実践し、その成果についてまとめ、検証を行った。学習には「言葉のネットワーク」というワークシートを利用し、刺激語から連想で思い浮かぶ10語の定着を目指した。学習の形式に慣れるため、刺激語を日本語で行うことから始め、その日本語に対応する英語を調べ、記入するという学習を20回程繰り返す過程での語彙構築を目指した。学習の前後に、50問の英単語テスト（プレテスト・ポストテスト）を課し、その結果から語彙力の伸長の有無を検証した。大半の生徒が点数の伸びを見せたため、学習の有効性を確認することができた。

学習者による連想を利用したワークシート学習が、「自分主導」で取り組み、学習内容を「視覚的に確認」でき、シートを埋めることで「達成感」を味わえるという点から、英語学習者の意欲の高揚にも繋がる学習方法であると考えられる。

**Key words：**連想 心内辞書 メンタルレキシコン ネットワーク

### 1. はじめに

世界の共通語として広く認識される英語が、我が国の教育課程に加わってから既に75年以上が経過している。中学・高校・大学と、足かけ10年にわたる学習期間をより有意なものにするために、各方面において多くの研究や指導実践が積み上げられてきた。しかし、未だに平均的な日本人の英語力は世界的に見ても高いとは言えない。日本語と英語の言語的な違いから、英語における語彙形成に困難を抱える学習者も

多く、言語習得の入り口である語彙をいかに獲得するかが大きなポイントとなっている。

新学習指導要領（小学校では2020年度から、中学校では2021年度から完全移行）において、旧学習指導要領では中学校卒業までに1,200語（小学校英語活動での400語弱と中学校での800語程度）であった語彙数を、中学校卒業までに一挙に2,200～2,500語（小学校600～700語、中学校1,600～1,800語）へと倍増させた。学校における語彙指導の一環として、兵庫県では「兵庫版中学生のための英単語集 ～はばだけ世界へ！『はば単』～」を作成し、中学生の語

\*<sup>1</sup> Kenji KOMIZO  
Ako Higashi Junior High School

彙指導への指針としている。これからの世界を生きるために必要な英語力を目指した『はば単』の活用を踏まえ、兵庫県では平成31年度以降、公立高校入試の英語試験問題において、『はば単』に収録の1,700語（2021年度からの第2版では2,500語。本稿においては第1版について扱う。）への注釈を付けないこととしている。

## 2. 自身の知識（経験）に基づく語彙形成

中学生期の英語学習において、語彙力は英語力の大きな鍵を握る。読み書きに使用できる語数の増加に伴い、理解や表現ができる内容の多様性も増す。

本稿は、英語学習者の語彙力向上のための学習方法として、連想によるワークシート学習が有効であると考え、実施、検証した内容をまとめたものである。英語学習をはじめ外国語教育において authentic（本物の、生活に則した）ということが盛んに言われてきたが、普段の学習者の生活と密接に関わった日本語（外来語）の言葉を、改めて英語として認識しなおすことは、authentic な学習の幅を広げることに他ならない。日本国内では、英語環境で生活することや

英語で過ごす時間を作り出すことがとても難しい。環境を変えられない以上、学習者が自身の取り組みの内容を工夫をしていくことが求められる。

そこで、普段使っている日本語の言葉を間に置き、連想を通して自分の身近な言葉とのつながりを再確認させた上で、日本語を英語に直していく方法について考えた。つまり、英語で直接、「minute」「hour」「day」「week」「month」という時間的なつながりを示す語群を思い浮かべることが難しくても、日本語で「分」から時間の広がりや連想していけば、「時」「日」「週」「月」という言葉のつながりを想起することは比較的易しいと思われる。その上で、関連語のネットワークを利用して、日本語と英語をひとまとめにしつつ言葉をつないでいくことで、語彙の形成がより身近で、容易なものになるのではないかと考えた。

また、実際の取り組みとして、頭の中で言葉を思い浮かべるだけでは印象が薄かった語と語のつながりを、「言葉のネットワーク」シートを用いることで視覚的にも認識し、より強く印象に残すことが記憶の定着に有効であると推察

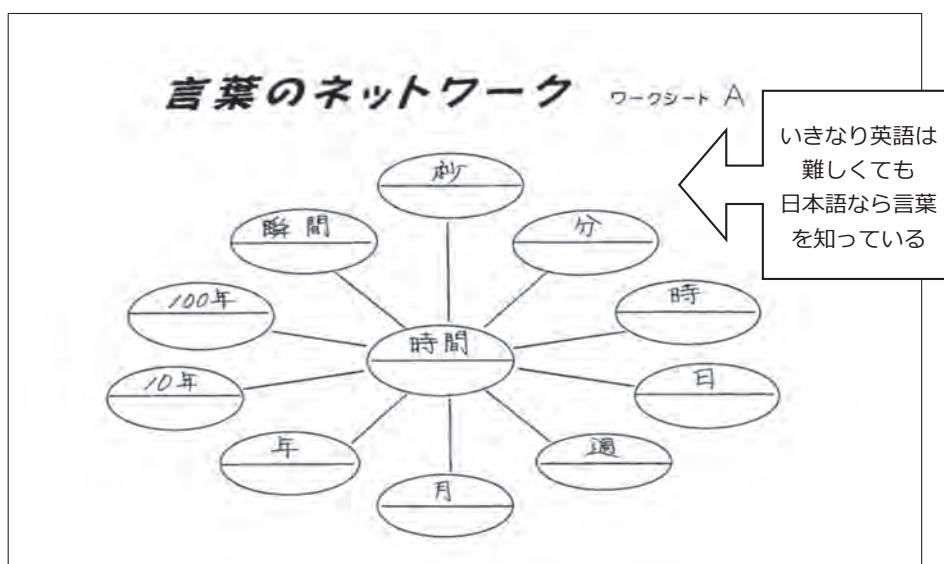


図1 連想によりつながる言葉の可視化

した。頭の中のメンタルレキシコン（心内辞書）は、流動的で取り留めのない言葉の海のようなものである。言葉のつながりは学習者が自分で理解しているつもりでも、再現可能性は個々の学習者の記憶の度合いに委ねられる。浮かんで消える言葉の海から、刺激語を核とした語群を認識し、1つ1つの語を書き留め、つなぎ留めていくことで、自分独自の「言葉のネットワーク」が確認でき、英単語の定着にも効果を発揮すると思われる。

日本語（もしくはそれ以外の母語）の文化の中で育った学習者は日本語（母語）のメンタルレキシコンをもっており、日本語（母語）話者である以上、これまでの生活体験の中で獲得し

てきた日本語（母語）の語彙が存在する。例えば、先に述べたように、「時間」という言葉（刺激語）から時間の単位である「秒、分、時、日、週、月、年、10年、100年、瞬間」という10語程度の言葉（個々の学習者によって連想するものは違う。）は、自分の中で容易に紐付けすることができる。メンタルレキシコン内での連想を利用して、その一部を切り取るように活用することは、同じことを英語の「time」からやろうとするのに比べると、明らかに容易であると考えられる。日本語（母語）のメンタルレキシコン内での言葉のつながりを生かし、そのネットワーク内の日本語の単語を英語に置き換えていくことで、英単語は印象に残りやすくなると考えられる。

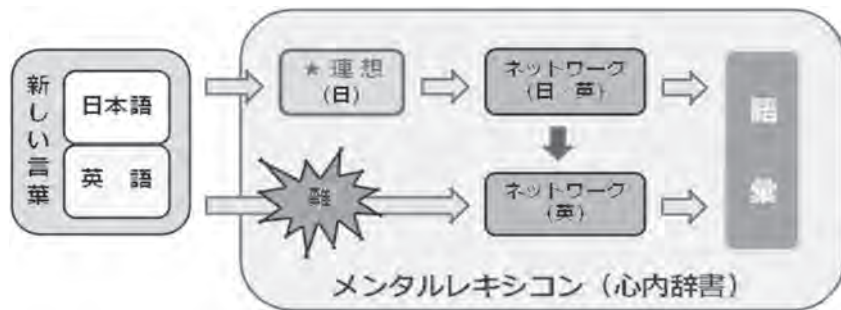


図2 連想を経た語彙形成

語彙形成の難しさは、学習者が現時点で保持している知識とつながる語彙に、新しい語をいかにつないでいくかという点にあり、法則性であれイメージであれ、言葉と言葉の意味をどのようにつなげていけるかが鍵となる。新しい英単語を学習する際に、いきなり英語のメンタルレキシコン内のネットワークに組み込むことができればよいのだが、そのままでは定着まで辿り着けない、つまり、英語のまま記憶に残すことに困難を抱える学習者が多い。そのため、上の図にあるように、学習者が既にもっており、日々頻繁に活用している、日本語（のメンタルレキシコン）に拠る「連想」をバイパスとして利用することで、日本語のネットワークから英

語のネットワークを経由して英語のメンタルレキシコンに入り込み、新しい語を語彙の中へ定着させることが可能になるのではないかと考えた。

「英語学習において語彙形成は学習を進める上での大きな柱である。それぞれの英単語は独立して存在するが、使用に際しては他の語との関連（文脈）の中で用いられ、理解される。語彙習得の過程では、まず形式と意味のつながりを確立する mapping が行われる。次に、学習者が構築した語彙の中で他の語とのつながりを形成する network building がなされる。」(Aitchison,2003)。「学習者の語彙が増えるにつれて、「心内辞書」の構造にも変化が起

こる。「心内辞書」を必要に応じて並べ替えたり、つながり方を変更したりして、より速く効果的に目的とする単語に到達するようになる。」(Meara,1996; Schmitt,2010)。

これらの先行研究に見られるように、語彙形成にはメンタルレキシコン（心内辞書）が大きな役割を果たすと考えられる。また、立石は心内辞書ではなく、概念地図について以下の様に述べているが、概念はある事象や内容を言葉で規定するものであることから、同様の内容を表現していると考ええる。「個々の学習者は新しい言葉に出会ったとき、その言葉がいかなる性質のもので、いかに分類すべきかを考え、自身が既にもつ概念地図の中に円滑に組み込もうとする。概念地図内のネットワーク構築においては、学習者のそれまでの経験に基づいた「連想」が大きな役割を果たす。」(立石 2015) なお、「連想 (association)」の定義は“a mental connection between ideas” (Oxford Advanced Learner’s Dictionary) であり、単語のネットワークは「連

想」によって広がる。ネットワーク上の行き来を繰り返し、個々の単語はより深く印象づけられる。学習した英単語を適切に使用できて初めてその語の習得が認められ、習得語数が増えたときに語彙力の向上が認められる。

下図と関連した「連想」の効果は、学習者が新しい言葉に出会ったときに、「ラベリング」と「パッケージング」に代わって、その言葉を「ネットワークビルディング」まで導くことにある。英単語を覚えようとするとき、英語の単語そのままでは「ネットワークビルディング」まで辿り着けない、つまり、英語のまま記憶に残すことが困難な場合に、学習者が既にもち、日々頻繁に活用している、日本語（のメンタルレキシコン）を「ネットワークビルディング」までのバイパスとして利用することを考えた。以下では、英語の学習における日本語のメンタルレキシコンに拠った「連想」の有効性について検証する。

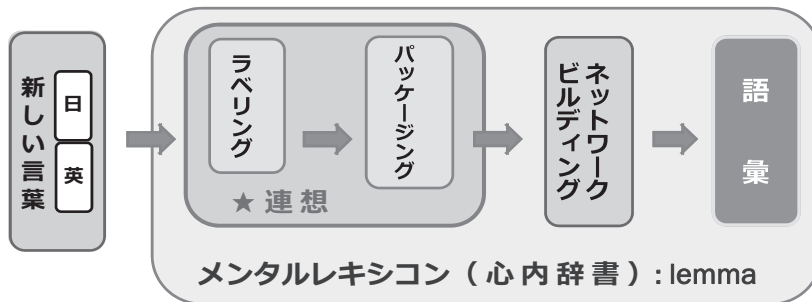


図3 連想が果たす役割

### 3. 身近な素材を連想でつなぐ、語彙形成への取組

中学生の語彙を『はば単』（第1版）の中で見てみると、名詞約1,000語、動詞約400語、形容詞150語、副詞約100語（概算）というように、具体的で身近な単語が多いことがわかる。抽象的な単語は高校以降の学習で語数が増加するが、中学生段階では名詞を中心とした具体的

な単語が多いため、「言葉のネットワーク」シート（以下ワークシート）を用いて、刺激語から連想によって単語をつなぐ学習を繰り返し進めていくことが効果的だと考えるに至った。まず、刺激語として学習者（中学生）に関係が深いと思われる言葉（例：時間、家族、自然、身体、数、食物、国、色、学校、スポーツ等）を設定し、それらの語から連想できるもの（語）を10個

思い浮かべる。連想を利用した反復練習を繰り返すことで個人内の「言葉のネットワーク」を広げ、もしくは再確認させ、メンタルレキシコン内での言葉同士の結びつきを強化させる。これまでに覚えた単語の復習としての効果も期待できる。

ワークシートを利用した学習の結果として語彙の増加が期待できるが、中学生として定着させたい語群と、各学習者が連想によって思い浮かべる語群とは必ずしも一致しない。そのため、部分的にネットワーク内にいくつかの単語をヒントとして与え、ターゲットとなる語群の定着へと導く方法も用いる。ワークシートに自分が思い浮かべる言葉を書き足していくことで、自らの語彙に拠った言葉の連なりを視覚的にも確

認できる。1つの刺激語から10語という数は決して多くはないが、中学生が「これくらいならできそう。」という印象をもつことは、学習意欲の喚起につながると考えられるため、10語に設定した。また、刺激語を含む11語のネットワークは、あくまでも複雑で重層的な学習者のメンタルレキシコンのほんの一部を切り取った部分であるとの認識から、回数を重ね、学習者個々の語彙が増えることで、そのネットワークの部分々々が強化されていくことになると考ええる。本稿の研究対象となる中学生は32名である。生徒たちの身近な題材で、興味を刺激しそうな刺激語を以下のように選び、ワークシートのAとBを組み合わせて20回の実践に取り組んだ。

表1 刺激語一覧

○「刺激語」の内容とその順番（「刺激語」は自分に関連の深いもの）			
1 自分	2 学校	3 時間	4 好き
5 動き	6 形容詞	7 色	8 国
9 動詞	10 食べ物	11 体	12 人物
13 自然	14 月と曜日	15 body	16 person
17 動物	18 have	19 動詞	20 me
➡日本語はAのシート、英語はBのシートを利用			

「言葉のネットワーク」シートを利用して、学習者が自分の連想に従った「言葉のネットワーク」を形成する練習を行うことは先に述べた。20回の練習を通して、生徒たちは1つの言葉が刺激語となり、自分の知っているたくさんの言葉につながっていくことを理解した。そこで、学習の前後で、生徒たちの英語の語彙力を調べる英単語テスト（プレテスト／ポストテスト、以下：プレ／ポスト）を実施し、自分自身もつメンタルレキシコンに拠った連想を利用すれば、英単語の習得が効果的に進むことを検証した。英単語テストの内訳は、名詞30問、動詞10問、形容詞10問の計50問を出題する

こととした。時間設定は、50問という問題数から「英語から日本語の意味を書くテスト」(A)を6分で行い、その後、「日本語から英語の綴りを書くテスト」(B)を8分で行うこととした。より長い時間での実施も可能であるが、どれだけ定着しているかを測る上では、比較的短時間での実施が有効であると考え、プレ、ポスト共に同様の流れでテストを実施した。出題はJACET8000（大学英語教育学会基本語リスト）に基づく「JACET8000英単語」という英単語集に拠った。1,000語（中学生レベル）までの範囲（名詞411語、動詞221語、形容詞115語、他）から、同英単語集は出題頻度順に編集され

ているため、プレ、ポストともに、それぞれの品詞毎の頻度順10番区切り（例えば、名詞の頻度5番目、15番目、25番目、…という具合で、テスト毎、品詞毎に順番は異なる。）で出題し、問題の難易度が同程度になるように配慮した。

中学生期の語彙数が2,200～2,500語に倍増（新学習指導要領）され、今後、授業を中心とした学習活動の中で、これまで扱われてきた語数よ

りも多くの語彙指導が行われる。1,000語レベルの語彙は、2,500語に比べるとかなり少なく感じられる。しかし、学習の基礎となる1,000語をきちんと習得することは、以後の語彙形成への強固な礎を築く意味でも重要である。上記、プレ、ポストについて得点集計をまとめると次のようになる。学年によって英語学習に費やしてきた時間数が異なるため、語彙や知識量には差

表2 英単語テスト（プレ・ポスト）の得点集計結果

## ①【英語から日本語の意味を書くテストの得点】

プレテスト（名詞30問、動詞10問、形容詞10問の計50問）

〈平均点〉 19.3 / 50点

全校生（32名）	名詞	11.5 / 30、	動詞	4.8 / 10、	形容詞	3.0 / 10
1年生（10名）	名詞	5.1 / 30、	動詞	2.9 / 10、	形容詞	1.1 / 10
2年生（12名）	名詞	11.3 / 30、	動詞	4.7 / 10、	形容詞	3.0 / 10
3年生（10名）	名詞	18.1 / 30、	動詞	6.7 / 10、	形容詞	5.0 / 10

ポストテスト（名詞30問、動詞10問、形容詞10問の計50問）

〈平均点〉 22.5 / 50点

全校生（32名）	名詞	13.3 / 30、	動詞	5.5 / 10、	形容詞	3.7 / 10
1年生（10名）	名詞	9.0 / 30、	動詞	3.5 / 10、	形容詞	2.0 / 10
2年生（12名）	名詞	14.5 / 30、	動詞	5.8 / 10、	形容詞	4.0 / 10
3年生（10名）	名詞	16.3 / 30、	動詞	7.0 / 10、	形容詞	5.1 / 10

## ②【日本語から英語の綴りを書くテスト】

プレテスト（名詞30問、動詞10問、形容詞10問の計50問）

〈平均点〉 16.9 / 50点

全校生（32名）	名詞	8.7 / 30、	動詞	5.2 / 10、	形容詞	3.0 / 10
1年生（10名）	名詞	2.8 / 30、	動詞	3.1 / 10、	形容詞	1.2 / 10
2年生（12名）	名詞	8.2 / 30、	動詞	5.2 / 10、	形容詞	2.2 / 10
3年生（10名）	名詞	15.3 / 30、	動詞	7.3 / 10、	形容詞	5.9 / 10

ポストテスト（名詞30問、動詞10問、形容詞10問の計50問）

〈平均点〉 22.2 / 50点

全校生（32名）	名詞	13.0 / 30、	動詞	5.4 / 10、	形容詞	3.8 / 10
1年生（10名）	名詞	8.4 / 30、	動詞	2.7 / 10、	形容詞	1.8 / 10
2年生（12名）	名詞	12.7 / 30、	動詞	6.3 / 10、	形容詞	4.3 / 10
3年生（10名）	名詞	17.8 / 30、	動詞	7.1 / 10、	形容詞	5.2 / 10

がある。これまでの英語への取り組みがどのようなであったかが、最も基礎にあたる語彙力として表れるので、学年が上がるにつれて平均点は上がっている。1年生は英語の学習経験の少なさ、授業の少なさが得点にも表れたためにプレ、ポストともに、得点の伸びが少なかった。2年生はこれまでの学習成果とプレでの伸び代が上手く作用し、ポストでは大幅な伸びを記録した。3年生はこれまでの英語の学習時間が最も長く、元々の知識も多いことからの得点だが、ポストでの伸び率は少なく、プレからの高止まり傾向が見られる。英語学習にかける時間の増加とともに、得点力は微増微減はあるものの、安定していくと予想される。

#### 4. 連想を利用した語彙指導から得られる知見

「言葉のネットワーク」シートを利用した語彙指導効果の検証にあたり、同等の難易度に設定したプレ・ポストの単語テストを行った。その結果、前述のように1年生から3年生までの32名全体の平均点の向上が見られた。「英語から日本語の意味を書くテスト」(A)、及び「日本語から英語の綴りを書くテスト」(B)の双方において伸び率に差はあるものの、共に平均点の伸びが見られた。前者(A)では、プレで19.3点であった平均点が、ポストでは22.5点へと上がった。また、後者(B)でもプレで16.9点であった平均点が、ポストでは22.2点という結果を得た。(A)、(B)のプレ・ポストの結果を学年別に見ると、(A)(英→日)の平均点は、1年生がプレ9.1点→ポスト14.5点、2年生が19.0点→24.3点、3年生が29.8点→28.4点であった。この結果から、1、2年生は平均点が上がリ、3年生のみ平均点が下がったことがわかる。また、(B)(日→英)の平均点は、1年生7.1点→12.9点、2年生15.5点→23.3点、3年生28.5点→30.1点と、全学年総合の平均点が上がっている。つまり、全体の中で、3年生の(A)の

テストのみ点数が下がった。

次に、個人について見ていくと、(A)のテストでは32名中21名(全体の66%)の生徒に得点アップが確認できた。50点満点中における得点の伸びを見ると、内訳は10点以上伸びた生徒が4名(同12.5%)、3点以上が18名(同56%)であった。また、(B)のテストでも、32名中25名(同78%)の生徒に得点アップが確認できた。こちらも50点満点中における得点の伸びは、10点以上が7名(同22%)、3点以上が21名(同66%)であった。プレとポストの比較により、多くの生徒に得点の伸びが見られたので、「言葉のネットワーク」シートを用いた学習を行うことによって、得点力がアップし、学習前よりも語彙形成が進んだと考えることができる。ただし、語彙の記憶の正確さや定着している期間についての検証は、今回の研究では行っておらず、今後、改めて考察したいと考える。また、ワークシートを用いた学習を「行った集団」と「行わなかった集団」に分けた調査の実施も考えたが、協力校の調査対象生徒の人数が少なかったため、実施を見送ったことを申し添える。

更に、語彙形成に与える効果として、アンケート調査を行った結果、生徒たちの学習意欲の向上が認められた。「言葉をつなげることが楽しかった。」(全体の87%)、「語彙学習への関心や意欲が向上した。」(同81%)、「日本語での連想が英語にも役立つと思う。」(同91%)、という内容から、連想を利用した学習を楽しみと感じる生徒が多かったことや、自分の発想で言葉のつながりを確認することができたことにやる気と達成感を感じている生徒も多い。全体の90%以上の生徒が、「単語力がついた。」「連想は役に立つ。」と感じており、「自分主導」「視覚的効果」「達成感」を伴う学習の効果が示されたと考える。

ここである生徒の取組を紹介する。前述のように「言葉のネットワーク」シートには10個

の空欄がある。生徒たちに「国（名）」という刺激語を与え、10個の空欄が時間（5分）内に埋まってしまった場合には、空欄を付け足して設け、更に連想を広げるよう促した。たくさんの国を知っているその生徒のワークシートには実に27個もの国名が書かれていた。この生徒は空欄を書き足すことは後回しにして、とにかく1つでも多くの国名を書くことを楽しんでおり、ワークシート上は一面、国名で埋まっていた。その中には、フランス、イタリア、韓国等々、よく耳にする国はもちろん、北マケドニア、ベラルーシ、キルギス、ドミニカ共和国といった耳慣れない国なども登場していた。（図4）

このように、自分が興味を抱いているテーマに巡り合い、自分の力を発揮しようと努力するときの生徒たちは、我々が想像する以上の力を発揮する。時間の制約さえなければ、その生徒はいくらでも知っている国の名前を書き続けようとしていたに違いない。もちろんこの生徒がそれらの国を訪れたことは未だない。しかし、国名の響きから様々なことを想像し、空想し、他の情報を加味しつつ、自分の頭の中で広い世

界を駆け巡っていることが見て取れる。刺激語はあくまでもきっかけであり、ある生徒にとってはまったく関連性のない2つの言葉が、別の生徒の頭の中では、これまでの経験と相まって強く結び付くこともある。単層的な言葉同士のつながりが、ある言葉やイメージ、もしくはきっかけを経て、重層的に複雑に絡み合う。ひとつの言葉をどのように受け止めるかは学習者によって違う。自分の経験や知識を活かし、どのようなワークシートを創り出していくのか。そこには誰もマネのできない、自分だけの言葉のネットワークが広がっていくと考えられる。

また、同時に3つの課題も浮かび上がってきた。まず、1つ目は「継続することへの動機付けの必要性」である。連想を利用した学習は、語彙を増やしたいという強い思いがあれば、継続への大きな動機になるが、人によって思いの強さや意欲が違うため、動機付けを一様に行うことは難しい。次に2つ目が「様々な刺激語への対応」である。学習者それぞれに個性があるように、個々の刺激語に対する反応には個人差があり、好みによって刺激語への反応や関心の

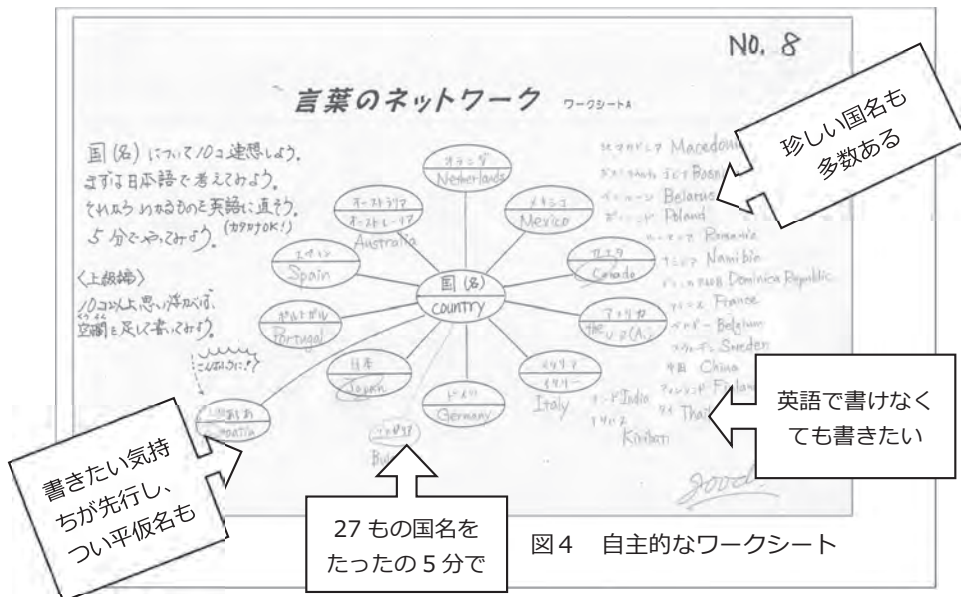


図4 自主的なワークシート



度合いが変わる。得意な分野をより強化することは大切だが、苦手な、不得意な分野をできる限り小さくする努力も必要である。様々な分野の刺激語について、少しずつでも知識を増やし、対応力を高めることで、学習者の言葉のネットワークはより大きく、確かなものになる。そして、3つ目は「まちがいを書くことへの拒絶感」である。ワークシートへの記入や単語テストへの回答の際に、生徒たちが空欄を残すことが多く見られた。これは、得点が低い生徒に顕著な特徴でもあった。答えがわからない場合に、自信がなくても何かを書こうとするのではなく、不確実なら取って書こうとしない生徒が多かった。間違えることで印象に残り、復習によって定着が進む。そのような学びへの意欲は低い傾向にあると思われる。

連想を利用した学習や英語学習について、生徒たちは主に、「自分で考えて単語を書くことは楽しい。」「知識(単語)が増えることは楽しく、うれしいと感じている。」「連想を使うことは有効である。」「想像することを繰り返すことで想像力も強化できる。」「書ける単語が増えることで力が付いていることを実感できる。」「海外への興味をもっている。」「英語を理解でき、話せる姿に憧れている。」というように、極めて肯定的に捉えていることがわかった。また、教師からの感想も、「英語学習に意欲を見せる生徒が多くなった。」「単語を覚えようとがんばる姿勢が得点アップの要因になった。」「黙々とやる姿を多く見ることができた。」「繰り返して行うことでやり方に慣れ、楽しめるようになる。」と、前向きなものが多いことがわかった。

アンケート結果からも、言葉のつながりを広げる学習が楽しいと感じる生徒が多かったことが示されており、とりわけ「与えられるのではなく、自分主導でやる楽しさを感じていた」ことが、本研究に関する調査において浮き彫りにされた。「自分主導」「可視化」「達成感」が、

学習を効果的で意味あるものにするためのキーワードである。ワークシートの反復練習を通して連想のトレーニングを積むことで、学習意欲の向上や単語習得への自信が見られるようになった。そして、その結果として生徒たちは言葉のつながりをより意識するようになったと考えられる。ただ、中にはワークシートを用いたトレーニングを、「自分には合わない。」「おもしろくない。」と感じる生徒もいた。そうした場合には、他にもいろいろな学習方法があること、自分に合う方法を見つけることが大切なことを指導している。また、言葉をつなぐことは語彙習得のみならず、自分の思考やアイデアを整理する場合にも効果的であることも伝えている。

ワークシートを用いて、日本語を英語に置き換える学習方法の効果について考察してきたが、それはあくまでもメンタルレキシコン内で、ある言葉に辿り着くまでの方策としての1つのアイデアに過ぎない。そして、その言葉を連想できるからといって正しい「綴り」や「発音」が自動的に頭に浮かぶわけでは決してない。「綴り」を覚えるための反復練習は必須であり、「発音」についても繰り返し自分で声を出して覚える取組は不可欠である。その上で、「綴り」や「発音」を正しく覚えるために、自分で工夫し、定着させるための方法を考え出す努力を続けなければならない。自発的な努力や工夫抜きに語彙習得は進まない。

語彙習得は英語学習の一番の基本であると同時に、学習が進み、知識が積み上がるにつれて、より重要度が増す礎の部分でもある。新しい言葉や興味を抱く言葉、強く惹かれる言葉たちとの出会いを大切にすることで、また次の新たな視野が広がっていく。たくさんの言葉を自分の知識とするために、目の前の1つからその裾野を広げてほしい。学ぶことで英語を更に好きになる。そのような学習が継続していくことを切

に願う。

本論は、令和3年度に関西福祉大学大学院教育学研究科に提出した修士論文に加筆修正したものである。

## 参考文献

惟任泰裕 (2017) 『学習指導要領改訂に見る戦後日本の英語教育史』教育科学論集』20. 1-20

小森早江子 (2015) 語彙連想課題における日本語と英語の相違について. 人文学部研究論集 = Journal of the College of Humanities (33) , 69-79, 2015-01

兵庫版中学生のための英単語集 第1版 ～はばたけ世界へ! 『はば単』～ (兵庫県教育委員会)

学習指導要領 (2019) 文部科学省

世界国勢図会 (2018) (公益財団法人) 矢野恒太記念会編集

Nation, I. S. P. (2001) . *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge University Press.

Schmitt, N. (2000) . *Vocabulary in Language Teaching*. Cambridge University Press.

Bhatia, S. (2011) *This Tiny Particle Could Roam Your Body to Find Tumors*. TED Talks Live., New York, USA.

Botton, A. d. (2011) *Atheism 2.0*. TEDGlobal 2011, Edinburgh, UK.

Jaatinen & Maakkinen (1993) The Size of Vocabulary of University Students of English. In K. Sajavaara and S. Takala (Eds.) , *Finns as Learners of English: Three Studies* (pp.140-155) . Cambridge: Cambridge University Press.

門田修平 (2003) 『英語のメンタルレキシコン 語彙の獲得・処理・学習』東京: 松柏社.

門田修平 (2002) 『英語の書きことばと話しことばは いかに関係しているか: 第二言語理解の認知メカニズム』東京: くろしお出版.

湯川祐子、猪坂敏行、門田修平 (2005) 視覚提示さ

れた英文の意味処理に、語彙知識はいかに関与しているのか: 語彙サイズ・連想能力と英語リーディングとの関係. 『言語コミュニケーション文化』3(1) (通号3) 2005.12 p.17-32

皆川 順 (2004) 連想課題を用いた概念地図作成法の効果の検討. 『日本認知心理学会発表論文集』2004 (0) , 122-122, 2004 (2019) 連想課題は知識構造に変化を与え得るか: 概念地図法による知識体制化を基に. 浦和論叢 (60) , 37-52, 2019-02

生田好重 (2008) 英語教育における効果的な英単語記憶方法の開発への試み -- 英単語の記憶保持に肯定的感情が及ぼす効果から. 『近畿大学短大論集』41 (1) , 47-57, 2008-12

鳥羽素子 (2016) 日本人英語学習者の語彙連想とライティング力との関係. 都市文化研究 Studies in Urban Cultures, Vol.18, pp46-57EF 2019年調査 (2019) 国際語学教育機関「EF エデュケーション・ファースト」

井川麻里 (2005) 説明文読解を補助する「かく」活動 - 要約作成法と概念地図作成法の指導・応用可能性 - 中国地区英語教育学会研究紀要 35 (0) , 107-116, 2005

石川純子 (2011) 中部地区英語教育学会紀要 44 (0) , 33-40, 2015

岸 学 (2000) 概念地図法. 日本教育工学会編, 教育工学事典. 実教出版, 66-68

立石力斗 (2019) 知的障害のある高校生を対象とした概念地図法による語彙指導に関する事例研究. 日本教育工学会論文誌 43 (2) , 167-173, 2019

Brendan Rodda (2008) *Connections to existing knowledge: The effectiveness of methods of vocabulary acquisition*. Comparative Culture. 14: 5-12, 2008

Novak, J.D. & Gowin, D.B. (1984) *Learning how to learn*. Cambridge University Press. 199p

Levelt, W. J. M. (1989) *Speaking · From Intention to Articulation*. Cambridge, Mass: MIT Press.

石川慎一郎 (2014) JACET8000の改訂過程 <JACET基本語改訂委員会特別シンポジウム> JACET 全

国大会要綱 53, 54, 2014

大学英語教育学会基本語改訂委員会(編著)(2003)『大学英語教育学会基本語リスト JACET List of 8000 Basic Words』東京:大学英語教育学会.

大学英語教育学会基本語改訂特別委員会(編著)(2016)『大学英語教育学会基本語リスト 新JACET8000』東京:桐原書店

相澤一美、石川慎一郎、村田年、磯達夫、上村俊彦、小川貴宏、清水伸一、杉森直樹、羽井左昭彦、望月正道(2005)『JACET8000 英単語「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく』東京:桐原書店.

北川達夫(2005)フィンランドメソッド入門. フィンランドメソッド普及会

村上存、小田隼(2009)複数言語の語彙ネットワークを用いた発想支援の試み. 日本デザイン学会研究発表大会概要集 56 (0) , H01-H01, 2009

## Abstract

### A Study of Vocabulary Building for Junior High School Students with a Mental Connection between Ideas in Mental Lexicon

Ako Higashi Junior High School Kenji KOMIZO

Many Japanese students have difficulties in building their English vocabulary, especially in elementary and junior high school. The New Course of Study of Japan focuses on enforcing English ability of the basic learners. However hundreds of former studies show us many ways of learning English and how to build English vocabulary, we still haven't found solid strategies to encourage students to build English vocabulary efficiently.

Normally it's very hard for students to memorize English words directly and right away, but if they use connecting ideas in Japanese through their mental lexicon, we suppose, memorizing words would become much easier. One Japanese stimulus word can be a trigger to reach to ten connecting Japanese words. So we came to this worksheet drill exercise filling out 10 circled spaces with words. Students are supposed to try worksheet drills twenty times, using the worksheet named "Kotobano-Network (Network of Words)". The exercise is like making word chains on the sheet by connecting ideas through learners' Japanese mental lexicon.

To examine the efficiency, students are supposed to take word tests (pre-test/post-test) before and after the drill exercises. As a result, most of them could gain better points on both post tests (English to Japanese & Japanese to English). Therefore, it can be mentioned this drill exercise works quite well to help to expand learners' vocabulary.

This worksheet drill exercise is supposed to be one of the efficient ways of vocabulary building. Because it's self-directed, the course of drill is clear and visible, and they can achieve tasks. These factors activate learners' motivation to build larger and wider vocabulary.

Key words : Mental connection between ideas, Mental lexicon, Network